

マニエリスム芸術伝播のケース・スタディ:イタリアから日本へ

大阪芸術大学 教養課程 准教授 小谷 訓子

この研究は、1549 年から 1614 年までの期間においてイエズス会を通して日本に輸入されたイタリアのマニエリスム芸術を取り上げ、芸術の伝播の問題を考察するケース・スタディである。大航海時代における日本と西洋の文化交流については、研究対象にすべき問題が多々あることから、膨大な量の研究業績が存在する。従って今回は、先ず研究の対象とする期間を、1549 年フランシスコ・ザビエルの鹿児島上陸から、イエズス会が正式に日本撤退を決めた 1614 年までに設定し、対象とする作品も日本イエズス会が関係するイタリア源泉の宗教画に限定した。そしてイタリアから輸入された絵画や版画と、それらをモデルとしてイタリア人画家ジョヴァンニ・コラに指導を受けた日本イエズス会セミナリオの学生たちが制作した作品群を検証し、マニエリスム芸術が極東まで伝播した視覚的証拠を提示すると共に、そこから読み取れる歴史的文脈を明らかにすることに努めた。

ジュゼッペ・ヴァレリアーノ作でローマのサンタ・マリア・マッジョーレにある『サルス・ポプリ・ロマーニ』、アントニオ・テンペスタの『聖母子と聖ドミニコとシエナの聖カテリーナ』などの図像がイエズス会によって日本まで伝播し、セミナリオで画学生の手によって模倣され、布教美術作品として生産されたことは、既に過去の拙論で検証した。本研究においては、これらモデル図像がイエズス会によって日本布教の図像として選択された背景などについても詳しく論じた。

1555 年にフィレンツェに生まれたアントニオ・テンペスタは、アカデミア・デル・アルティ・デル・ディゼーニョでジョヴァンニ・ストラダーノに学び、その縁でジョルジョ・ヴァザーリの下でパラッツォ・ヴェッキオの内装などの大きな仕事に携わるようになった。1570 年代には、ヴァチカン宮殿のフレスコ画や、バニャイアのヴィラ・ランテのフレスコ画、1580 年代にはカブラローラのパラッツォ・ファルネーゼの装飾を手がけていた。これら 3 箇所は、日本イエズス会から派遣された天正遣欧少年使節団が 1585 年にイタリアに到着して訪れた場所でもある。この使節団の目的は、公式に教皇グレゴリウス 13 世に謁見することであったが、同

時に日本に持ち帰るキリスト教布教のための書物や図像の調達でもあった。その当時テンペスタは、30 代の芸術家としてフレスコ画に限らず版画やエッチングなど幅広い媒体でもって活発に制作に従事していた。彼は、ローマにおける出版社やイエズス会、オラトリオ会などからも仕事の注文を受けていたので、彼の制作した図像は布教活動のもと、果ては極東まで辿り着いたのである。

偉大なイギリスの歴史家チャールズ・ラルフ・ボクサーが「日本におけるキリスト教の世紀」と称した 1549 年からの 100 年間に、日本に輸入された芸術作品は数多く、そしてその内訳は非常に複雑である。先ず、航路がリスボン発であることからポルトガル、そしてイタリア、スペイン、フランドル地方で制作された作品で、16 世紀中頃から 17 世紀初頭までにイエズス会の活動範囲において入手可能な図像、つまりそれらは、イタリア盛期ルネサンス様式、イタリア・マニエリスム様式、ポルトガルのオランダ風様式、ポルトガル・マニエリスム様式などといった様々な様式の作品群なのである。日本イエズス会は、それらの時代と地域の異なる様式の図像を同時に入手し、セミナリオの学生たちに模倣させたことから、当時の彼らの視覚文化は、正に複雑に入り組んだ多様式のコラージュであり、それは、根気よく紐解くことでしか理解できないと言えよう。今回の研究においては、イタリア源泉に焦点を絞ることでこの大きな問題の一部を照らす、という成果をもたらした。

「日本におけるキリスト教の世紀」の 100 年間は、日本史では戦国時代から江戸時代へと移行する変化の時代だが、イタリア中心の西洋美術史的な見地から捉えると、その 100 年間は、ルネサンス期にイタリアで巨匠たちに創造された写実的な芸術が、ピークを迎えた後にマニエリスムというデフォルメと技巧の発展を経た上で、世界各地に広がった伝播の時代、そして次なるバロック芸術の幕開けにかかる時代である。本研究は西洋世界の大航海時代終盤における人的・物的交流の活発な状態が継続したことで、芸術の伝播が幅広い範囲で行われ、極東までマニエリスム芸術が普及したという事例である。